目黒区の「中学生の自然体験事業」（実践事例報告）
ー 公募指導員と区職員の協力による自然体験事業の概要とその成果 ー

中川 聡
（攻玉社高等学校）

【要旨】　子どもたちの自然体験の不足が言われるようになってから相当の年月が経っているが、いざ教育行政サイドにおいて「自然体験事業」をおこなおうとするとこれはけっして容易なことではない。本稿は、筆者がかかわった目黒区の事例「中学生の自然体験事業」の成果や課題をまとめたものである。

参加した中学生たちには、おおむね好評であった。

公募による指導員たちの評価は、高校生のスタッフの評価も含め、こちらも好評であった。さらにこの事業の二次的成果として、他の事業へのボランティアとしての参加者・協力者が多くなった点も指摘できる。また、事業成功のカギは有能な指導者をうまく集め、彼らをまとめ、協力体制をつくることにあるようだ。

東京都の目黒区教育委員会では、夏休み中に千葉県の外房にある興津で「中学生の自然体験事業」を実施している。本稿は、教育委員会や区職員の立場からの報告ではなく、指導員として２回、その後団長として２回の計４年間にわたりこの事業にかかわってきた一区民という立場からの実践事例報告である。なお本稿は、日本生涯教育学会第23回大会での実践事例研究部会における発表に基づいている。

１．事業の概要

目黒区内には区立中学校が12校あるが、そのうち臨海学校を実施しているのは２校だけである。また目黒区では、小学生の健康増進のために全寮制の小学校となる興津健康学園を千葉県勝浦市興津に設置している。本稿で報告する「中学生の自然体験事業」は、夏休み中の興津健康学園を有効利用しようという発想も含まれているようだが、臨海学校をおこなっていない中学校の生徒たちにも海水浴を体験してもらおうと６年前に始めた事業が、そもそもの始まりのようである。開始当初は、担当者の苦労も多かったようであるが、ここ５回ほどは以下のような内容で、ほぼ安定して事業がおこなわれている。

なお、この事業においては、主催者である教育委員会はこの事業を研究開発的事業とは位置づけておらず、専門職員も担当していないことを最初に確認しておきたい。さらに、他の同種の事業とは異なり、専門職員が担当していないのにもかかわらずこの事業がうまく行われているのは、公募指導員と区職員の協力があればこそである。

(1) 事業の目的

事業の目的は、以下のように設定されている。

夏季期間における興津健康学園を有効活用し、中学生が集団宿泊生活と主体的な野外活

動を行い、興津の豊かな自然を直接体験することにより、生命や自然の大切さを認識し、豊かな情操と自主性・協調性・社会性を養うことを目的とする。

(2) 事業の実施日

６月～７月にかけて、事前交流会を２～３回実施。７月下旬から８月上旬あたりに３泊４日で事業を実施。９月～10月に、事後交流会を１回実施。

また、興津健康学園へのあいさつも兼ねて６月には現地に下見に行っている。

なお、2001(平成13)年度は８月７日(火)～10日(金)の３泊４日で、2002(平成14)年度は８月５日(月)～８日(木)の同じく３泊４日で実施している。

(3) 事業の場所

事前・事後交流会は、区内中目黒にある青少年プラザで実施。また４日間の事業は興津健康学園に宿泊し、近辺の海水浴場(興津・守谷・鵜原の各海水浴場)などを利用している。

(4) 主なプログラム

主なプログラムは、海水浴、室内レクリエーション、釣り、野外炊事(デイキャンプ)、ナイトハイク(肝試し)、花火、ウミホタル観察などで、野外炊事は鵜原海水浴場に隣接のキャンプ場を借りておこなっている。

(5) 参加者・スタッフ

参加者としておおむね30名の中学生を募集しているが、平成14年度は中学生だけでは定員を満たすのが難しかったため、小学６年生にも募集の手を広げている。

スタッフは、青少年プラザ職員１～２名、団長１名、看護婦(師)１名、指導者５～７名、高校生スタッフ５～７名で、平成14年度だけはボランティアスタッフ６名が追加されている。なお、今回で４回目になるが、３年前からは指導者と高校生スタッフを公募により集めている。また、高校生スタッフは、スタッフとしての役割も担っているが、事業の中での位置づけは「高校生のリーダーシップ養成のための講座」の受講生ともなっている。

第１表　参加人員

	13年度	14年度
団長	1	1
職員	2	1
看護師	1	1
指導者	8	13
高校生	7	5
参加者	39	29

平成13～14年度の参加者の内訳は、第１表のとおりであるが、11～12年度の内訳やこの事業の詳細については、参考文献の1)にある。

２．事業の成果(1) － 参加者の評価

参加者たちへ青少年プラザでおこなった終了時点でのアンケートの結果を抜粋すると、第２表～第４表のとおりで、おおむね好評のようである。とくに、体力に余裕のある参加者にとっては、４日間という日数では少々物足りないようである。

その他のアンケート結果は日本生涯教育学会第23回大会発表資料[2)]に載せてある。

なお、この事業には教育委員会サイドからは教育の専門職員がかかわっていないので、残念ながら教育的変容を測定するような本格的な評価はおこなわれていない。

第２表

今回自然体験事業に参加してどうでしたか？	13年度	14年度
1　とても面白かった	１６	１４
2　面白かった	１０	8
3　普通	１３	4
4　楽しくなかった	0	1

第３表

今回の日程はどうでしたか？	13年度	14年度
1　長かった	9	2
2　短かった	１３	１７
3　ちょうど良かった	１３	7
4　わからない	4	2

第４表

次回の自然体験事業に参加したいですか？	13年度	14年度
1　ぜひ参加したい	２０	１６
2　どちらとも言えない	１７	１２
3　参加したくない	1	0
4　別の場所なら行きたい	1	0

３．公募指導者の選考ならびにその二次的成果

この事業の特色の一つとして、指導者を公募により募集しているということがあげられる。当初、主催者側には公募によって指導者が集まるかどうかという不安もあったようだが、毎年多様な能力を持った方々からの応募があり、有能な指導者が集まっている。

ただ、一人ですべてのプログラムを完璧に指導できる全知全能な指導者というのはいるはずもなく、また応募者の多くは学生から青年層という実態から、団長という立場で第５表にあるような観点から選考方針を考えてみた。

これにより、この事業にかかわる参加者および指導者で、中学生～高校生～青年にかけてのバランスのとれた異年齢集団となり、主催者が多くを企てなくとも、自ずから教育的な集団ができあがったのである。具体的にいえば、中学生たちには多くのお兄さん・お姉さんができ、高校生スタッフは中学生たちに対してリーダーシップを発揮するとともに、近い将来青年として集団をまとめる際の手本を目の当たりにすることができる。また、年長の指導者たちにとっても、日頃活躍しているフィールドに還元できるだけの能力を磨くことができている。さらに、この事業で得られた指導技術やチームワークを他のボランティア活動で活かすことにもつながっており、事実、青少年プラザで行われている他の事業の参加者が増加傾向にあるのみならず、自然体験事業に参加した青少年たちがボランティアをかってでることで、青少年プラザの他の事業にも活気が出てきている。

当初の目的の自然体験事業としては、まだまだ十分にその目的を達成できているとは言えないはがゆい面も残ってはいるが、二次的成果としてこれだけ成果の出ている異年齢集団は、この事業のためだけに短期間に作られた集団であるにもかかわらず、今日の子どもたち・若者たちの気質を考慮すれば、すばらしいものであると自画自賛したくもなる。

第５表　指導者選考にあたって

「中学生の自然体験事業」の指導者選考にあたって

公募制のスタッフ募集も今年度が４度目となり、３年目の昨年度からは順調に軌道に乗り、多様な方々からの申し込みがくるようなった。ただ、事業の実施にあたり限られた募集定員の中で最大限の指導効果があげられるような人選が必要になり、かつ、この目的達成のための人選が非常に難しいことでもある。

そこで、主催者考案の「指導者・高校生スタッフ選考基準」、過去３回の参加経験、他のスタッフの方々の意見・アンケート結果、参加中学生の事後アンケートの結果等々から考えて、次のような選考方針を立ててみた。

以下の観点から、本事業の円滑な遂行に必要な指導者をバランスよく選考すべく、参加する中学生の特性や高校生スタッフも視野に入れつつ、総合的に判断し選考することが望ましい。

① この自然体験活動への理解はもちろんのこと、社会教育活動全般ならびに青少年プラザの事業をよく理解する者、あるいは良き理解者になるであろう方々が望ましい。

② 海での溺者救助、ライフセーブ活動、海浜での水泳指導などができる指導者が、３～４名含まれていることが望ましい。

③ 希望する参加中学生たちに対し、早朝の海釣りを指導できる指導者が、２～３名含まれていることが望ましい。

④ 往復のバス車内でのレクリエーション、水泳があまり得意ではない中学生対象に浜辺で行なうレクリエーション、夜間のプログラム、雨天時の対応など、レクリエーションや軽スポーツ等の指導ができる指導者が、２～３名含まれていることが望ましい。

⑤ 指導者の年齢構成は、中学生・高校生に年齢的に近い十代後半から、指導者たちをもまとめることのできる指導力をもった３０歳前後の年齢層まで、幅広くバランスがとれていることが望ましい。そうすることによって、中学生から青年世代にかけてのまとまりある異年齢集団が形成される。

⑥ 指導者の男女の人数比については、いくつかの考え方ができる。

ア　参加する中学生の男女比に近づける

イ　高校生スタッフの応募状況も考慮の上、高校生スタッフとの合計人数で考える

ウ　ここ数年参加する中学生は女子が少なくなっているので、彼女たちへの配慮として、指導者または高校生スタッフにおいて女性を若干多くする。

いずれにしても、極端に偏るのは望ましくない。
なお、参加中学生には女子生徒もいるので、看護師１名は女性であることが望ましい。

付　⑤および⑥と関連して、高校生スタッフにおいても、学年や性別が偏らないことが望ましい。

４．事業の成果(2) － 指導者側の評価

この項では、３に挙げた成果以外で、スタッフへのアンケートの結果からこの事業の成果と言えるものを抜き出してみたい。

自由記入の回答からは、

大きな病気や事故がなく良かった

初日のレクリエーションは中学生どうしの仲も深まって良かったと思う

バスの中でのレク、バスでの元気が良く楽しかった自己紹介

日の出ツアーが思った以上にきれいで良かった。来年も実施したい。

など、プログラムがうまくいった点が評価されているとともに、スタッフ皆が成就感・充実感を味わっている。

また、高校生のリーダーシップ養成という点では、第６表のような評価が得られた。

第６表

この事業のねらいの一つとして「高校生のリーダーシップ養成」ということがありますが、このねらいが達成できてると思いますか？		
１	充分に達成できている	２人
２	ある程度できている	１０人
３	ほとんどできていない	１人

５．事故防止と緊急時の対応

例年、事業がうまくいっていると安全への意識が薄くなるおそれがある。しかし、これだけの事業がある程度うまくいっている背景には安全への配慮が不可欠であることは言うまでもないし、ここ数年、主催者側も安全面への意識が高まりつつはある。

４日間の事業初日には、オリエンテーションの時間に、危険な生物への注意ならびに海で泳ぐ際の注意をおこなっている。具体的には、危険な生物では、陸ではハチやマムシ、海ではカサゴ・ゴンズイやウニなどのトゲであり、遊泳時には離岸流にあったときの対処法などである。これらと併せて、日焼け予防の注意も忘れてはならない。

また、緊急時の対応については、第７表のようなマニュアルを、団長を引き受けた際に公募指導員と区職員の協力のもと、団長としてこれを作成した。

第７表　緊急時対応マニュアル

自然体験事業 緊急時 対応マニュアル

１．寄宿舎で火災発生

① 階段・非常階段などを利用して、全員１階出入口の外に避難、集合、点呼

② 指導スタッフは、余裕があれば各部屋を確認の後に避難

③ 指導スタッフが１１９番通報

「勝浦市興津の目黒区健康学園の寄宿舎で火災発生。直ちに出動願います。」

④ 通報後に校門を開けに行く

⑤ 指導スタッフで初期消火が可能なら、消火器等を用いて消火

（初日に、消火器等の場所を確認しておく）

⑥ プラザ職員が青少年プラザ・教育委員会にも報告

２．大きなゆれ（地震）を感じた

① 即時、全てのプログラムを中断し、集合、点呼

（海からあがる際には、中学生を浮き具等につかまらせて、集団であがる）

② 集団で、寄宿舎または高台に避難し、再度点呼

③ 以下の３．または４．に従う

④ プラザ職員が青少年プラザ・教育委員会にも報告

３．津波警報発令

① 即時、全てのプログラムを中断し、集合、点呼

（海からあがる際には、中学生を浮き具等につかまらせて、集団であがる）

② 集団で、寄宿舎または高台に避難し、再度点呼

③　プラザ職員が青少年プラザ・教育委員会にも報告

4．津波注意報発令

①　全てのプログラムを中断し、集合、点呼
（海からあがる際には、中学生を浮き具等につかまらせて、集団であがる）

②　荷物等を片付け、まとめる

③　集団で、寄宿舎または高台に避難し、再度点呼

④　全員の安全が確認・確保されたら、青少年プラザにも報告

5．病人、けが人などが出た

①　大けがなどの場合には、指導スタッフが１１９番通報
「○○○で□□□のけが人がいます。至急、救急車の出動をお願いします。」

②　看護婦さんにみてもらう

③　病院等で治療してもらった方がいいと判断した場合には、
団長とプラザ職員に報告して、病院に搬送

○　病院で診てもらった場合には、治療の前後に家庭への電話連絡も忘れずに

○　救急車を要請した場合には、手のあいているスタッフが道路へ誘導に行く

＜参考＞　近辺の病院

- 川上病院（学園下の交差点前）　Tel 0470－７６－０３０１
- 長島医院（上総興津駅の近く）　Tel 0470－７６－００５２
- 鈴木歯科（駅入り口交差点前）　Tel 0470－７６－１０８１
- (学園医・救急病院)塩田医院（勝浦警察署・保健所の隣）　Tel 0470-73-1221

6．天候が急変しそう（雷雨の兆候、遠くで雷鳴など）

○　招集可能なスタッフだけでも集まり、プログラムの継続か中断を判断する

○　中断する場合には、全員に連絡をおこなうとともに、その理由も説明する

7．海水浴中にクラゲを発見

①　けっして大騒ぎしないこと

②　刺された場合には、5.に従う

○　簡単にクラゲが捕獲できそうなら、捕獲し安全なところに捨てる

8．中学生同士でけんかをした

①　すぐに止める

②　団長に報告

③　けがをしている場合には、5.に従う

④　プラザ職員が家庭に電話連絡

9．釣りの最中に海に落ちた

①　レスキューチューブを使って救助

②　海水を飲んでしまっている場合には１１９番通報
「興津海岸の西側堤防から誤って転落。救急車の出動をお願いします。」

③　学園で待機しているスタッフに連絡・相談し、着替えを持って来てもらうか、あるいは迎えに来てもらう

④　プラザ職員が家庭にも連絡

⑤　プラザ職員が青少年プラザ・教育委員会にも報告

10．海水浴中に溺者発見

①　「声かけ」確認し、笛や大声で周囲の人達に知らせる

②　意識がある場合は、ﾚｽｷｭｰﾁｭｰﾌﾞや浮輪等につかまらせ、浜まで引き上げる
（泳いで近寄る場合には、前からではなく背後から）

③　意識がない場合は、２～３人で協力し浜まで引き上げる

④　中学生たちがパニックを起こさないように、中学生を浮き具等につかまらせて、慌てずに集団で海からあがる
浜では、高校生スタッフが中心となり点呼をとり、班ごとに待機

⑤　必要があれば、心肺蘇生技術をもっているスタッフが交代で蘇生法を行う
⑥　手のあいているスタッフが、１１９番通報する
「○○海水浴場で溺者を発見しました。救急車の出動をお願いします。」
浜のライフセーバーにも応援を求める
救急車の誘導にも行く
⑦　溺者が関係者の場合、家庭と青少年プラザにも電話連絡を

＜参考＞心肺蘇生法新指針
・心マ開始の頚動脈触知はせず、循環の兆候(通常の呼吸、咳、体動)により、脈の有無を確認する。
・人工呼吸の吹き込み量は、体重１kgあたり１０ml(体重50kgなら500cc)。　１回の吹き込みには２秒以上かける。
・心マッサージは、１分間あたり１００回。
・救助者の人数にかかわらず、圧迫１５回、吹き込み２回を繰り返す。
・意識のない者に対しては、ハイムリック法は行わない。
・　〃　〃　口内異物確認や口内清掃を行わない。

６．本事業の課題

なかなかうまくいっており好評を得ている事業とはいえ、過去４回の経験からは、以下のような課題が考えられる。

(1) 参加者の募集

言うに及ばず、目黒区も少子化が進んでいる。さらに、夏休みといえども子ども達は、林間学校・部活動や塾・夏期講習などで忙しい。たとえ、自然体験事業をどんなに楽しいものにしたとしても、子どもの取り合い状態のなかで参加者を定員そこそこに集めることは容易なことではない。目黒区内の学校関係者の理解と協力を得ながら参加者を集めるのがもっとも確実な方法のようである。またそのためには、この事業が学校教育を裏切るようなことをおこなってはなるまい。

(2) 指導者の選考

若者の指導者やボランティアの募集という点においては、大学などの学生用窓口に依頼したり、アルバイト情報誌のボランティア募集の欄を利用することが有効であることがわかってきた。多くの応募者の中から、事業全体ならびに指導者全体のバランスを考慮して人選をおこなえば、事業も成功へと導けることもわかってきた。

そこで、指導者については次なる課題が見えてきた。それは、経験豊かな指導者と新しい指導者のバランスである。たしかに経験豊かな指導者を揃えれば、この事業は楽におこなえる。しかしながら公募制の趣旨として、地域の有能な人材の発掘ということもあり、また、ふだんは地域で活躍している若者たちが"他流試合"をおこなうことによって自らの指導能力に磨きをかける機会にもなっているのである。さらに、毎年同じような顔ぶれの指導者では、この事業がマンネリに陥る可能性も出でくる。今まで青少年プラザに足を運んだことがなかった若者たちに青少年プラザを知ってもらい、そこでの自然体験事業で貴重な経験をしてもらい、そこでできた人間関係をもとに青少年プラザの他の事業にも協力してもらえれば、青少年施設としてはこれほどありがたいことはない。まとめれば、有能な人材を発掘し、新人として迎え入れていく体制作りも今後は必要になろう。

(3) 成果の蓄積

成果の蓄積（これは、ノウハウの蓄積も含む）という点では、指導者の選考面から言え

ば上記(2)の配慮が不可欠である。

それとともに、青少年プラザの担当職員の面も無視できない問題である。「今後の社会教育館等のあり方について(答申)」[3]でも指摘されているように、目黒区の社会教育施設には専門職ないしは専門的力量をもった常勤職員が配置されていない。それ故、この種の事業を主催するに際し、他の多くの先行事例を参考にすることもなければ、専門的観点からの蓄積があるとも言い難い。もちろん一般行政職員としての引き継ぎなどは滞りなくおこなわれているのだが、教育の専門家でなければなかなか伝わりにくい事業のノウハウなどもあるはずである。そもそも、一般行政職員に教育的な指導や専門的指導を望むことじたい無理な話である。それゆえ、事業の成果の蓄積という点からも、常勤の専門職の配置が望まれるところである。

ただ、筆者がかかわった4回にわたる事業で、教育の専門職員が関わっていないのにもかかわらず、この事業がうまくいっているのは、サブタイトルにもある公募指導員と職員との強固な協力体制が作れたことが、事業成功の一要因になっていることを、ここに付け加えておきたい。区の一般職員だけでも、あるいは指導スタッフだけでも、この種の事業はうまくおこなえないのだから。

(4) 安全への配慮

上記(3) とも関係してくることだが、現場経験がほとんどない一般職の方々には、自然の中ではなにが安全でなにが危険であるかがなかなか認識してもらえず、安全のための予算が思うように認められないという現実がある。安全に直結することには優先的に予算をまわしてもらいたいところである。

また、4日間の事業中は、子ども大人を問わず、参加者全員の安全を最優先に考え、判断し、行動しなければならないことは言うまでもないことでもあるし、けっしておろそかにしてはならないことでもある。

7．おわりに

本報告は、あくまでも筆者の地元となる目黒区の一事例の報告にすぎないが、他の自然体験事業をはじめ、各種の青少年事業などの参考になれば幸いである。

さらに、子どもたちの自然体験の重要性が明らかになりつつあるときだからこそ、自然を愛し、自然界の持っている教育的効用と、時には危険を及ぼす自然を理解している指導者や専門家が一人でも多くなってくれることを願ってやまない。

参考文献

1) 拙著「目黒区の『中学生の自然体験事業』」 2001
国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要創刊号

2) 拙著「目黒区の『中学生の自然体験事業』
－ 公募指導員と区職員の協力による自然体験事業の概要とその成果 －」 2002
日本生涯教育学会第23回大会 実践事例研究部会 発表資料

3) 目黒区社会教育委員の会議（山本慶裕、他9名）
「今後の社会教育館等のあり方について(答申)」 2001